

氏名(本籍)	と きわ よう こ 常 盤 洋 子 (群 馬 県)
学位の種類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)
学位記番号	博 乙 第 1909 号
学位授与年月日	平成 15 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	出産体験の自己評価が産褥早期の母親意識に及ぼす影響
主査	筑波大学教授 教育学博士 新 井 邦二郎
副査	筑波大学教授 博士(医学) 江 守 陽 子
副査	筑波大学教授 P h . D . 石 隈 利 紀
副査	筑波大学助教授 教育学博士 服 部 環
副査	筑波大学助教授 教育学博士 桜 井 茂 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

(1) 目的

女性にとって出産期は母親になる重要な移行期であり、出産体験の自己評価のあり方が産褥早期の母親意識の形成に影響を及ぼす可能性などについて、以下4点を検討することを目的とした。

- ① 出産体験の自己評価の測定尺度の作成と、出産体験の自己評価に関連する諸要因の検討、および出産体験の自己評価と産後うつ傾向との関係の検討。
- ② 産褥早期の母親意識測定尺度の作成。
- ③ 出産体験の自己評価が産褥早期の母親意識に及ぼす影響についての検討。
- ④ 産褥早期の母親意識の形成を促進する出産体験の意味づけをサポートする援助のあり方の検討。

(2) 対象・方法

調査方法は、質問紙法と面接法を用いた。質問紙は、先行研究を参考にして、まず、産後2ヶ月の母親を対象に行った出産体験文章完成法テスト(SCT)で得られた母親自身のことばを使って質問項目を作成した。次に、産褥早期の母親を対象に出産体験の自己評価と母親意識に関する調査が実施され、出産体験の自己評価と産褥早期の母親意識を測定する質問紙が作成された。調査については正常分娩と異常分娩を経験した母親のデータを比較するために、1,500人の産褥早期の母親に質問紙を配布し1,130人からの回収が得られた。

近年、生殖技術の発達に伴い不妊治療による多胎児の出産は今後も増加することが予想される。多胎児の出産では単胎児に比べて帝王切開分娩になるケースが多い。そこで、経膈分娩と選択的帝王切開分娩、緊急帝王切開分娩を体験した母親の出産体験の自己評価と産褥早期の母親意識について多面的に検討を加える目的で双胎児を出産した母親15名を対象に面接調査が実施された。

(3) 主な結果と考察

出産体験の自己評価を測定する尺度(出産体験の自己評価尺度)が作成され、出産体験の自己評価と産後うつ傾向との関連が明らかにされた。また、出産体験の自己評価が低い場合、産後うつ傾向が強くなり、母親意識の

形成が阻害されることが指摘された。また、子どもが娩出されるときに産科処置（吸引・鉗子分娩，クリステル圧出）が実施された，子どもが生まれるまでに長時間かかった（遷延分娩），出産時に不安が強かった，出産時の夫の対応の満足度が低い場合は，出産体験の自己評価が低下することが明らかにされ，また信頼できる医療スタッフの存在があるかどうかは産後うつ傾向の出現を規定することが示唆された。出産体験の自己評価が低い場合に，出産体験の意味づけを援助することによって，出産による心理的不健康な状態（産後うつ傾向など）を克服できることが示された。さらに，発達の視点から出産体験の意味づけを援助するために，妊娠，出産，産褥期におけるヘルスカウンセリング的介入のあり方を検討する必要性を指摘した。

審査の結果の要旨

（１）批評

出産にかかわる自分や家族，病院のスタッフやケアの質などについての自己（主観的）評価を測定する尺度の開発を行えたことが，本論文の大きな成果であると言える。

次に，この尺度を使用して，出産体験の自己評価が産後うつ傾向や母親意識とどのように結びついているのか，その関連を取り上げ，具体的なデータに基づいて，それらの関連の一端を明らかにした点も，本論文の成果である。

本論文は主に看護学的ケアの観点から出産という体験について研究を行ったが，実際には，他のさまざまな要因も出産には含まれており，今後はそれらの要因を加味した研究が求められるであろう。

また，出産のネガティブな自己評価を持つ母親や産後うつ傾向を有する母親に対する支援等についても，看護学を主としながら，それ以外の分野も取り入れたケアの総合的な方法の開発も今後の課題として残る。

よって，著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。